

氏 名： 鷲尾 和

学位の種類： 博士（看護学）

学位記番号： 甲 第 2 号

学位授与年月日： 令和2年3月10日

学位授与の要件： 学位規則第4条第1項該当

論文題目： 急性期病院における高齢者のせん妄を予防する看護実践度測定
尺度の作成： 3回の調査結果の検討

Creation of a Nursing Practice Scale to Prevent Delirium in
Older Adults in Acute Care Hospitals : Examination of Three
Survey Results

論文審査員： 主査 石崎 智子

副査 西片 久美子 （主研究指導教員）

副査 高橋 清美 （第1副研究指導教員）

副査 河口 てる子

副査 姫野 稔子

論文内容の要旨

【研究の背景】

急性期病院では、高齢者の約 5～75%にせん妄が発生すると報告されており、死亡率の増加、認知機能や身体機能の低下、施設入所の増加などに関連している。しかし、その一方で、せん妄は 30～40%が予防可能と言われている。高齢者がせん妄を発症すると退院後の QOL に与える影響が大きいため、せん妄を発症する前に介入することの重要性が指摘されている。そのため、急性期病院におけるせん妄を予防するための看護実践を明確にし、看護実践の程度を測定できる尺度があれば、それらを指標として、せん妄予防のための看護実践の質の向上を図ることができると考えた。

【研究目的】

本研究の目的は、急速に進む高齢社会において、高齢者が入院することにより看護上の課題となる老年症候群の一つであるせん妄に着目し、急性期病院における高齢者のせん妄を予防するための看護実践の程度を測定する看護実践度尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することである。

【研究方法】

研究デザインは尺度開発である。尺度の作成過程は、イニシャルスケールの作成、2回の予備調査と3回目の調査を行い、尺度の信頼性と妥当性を検討した。

【尺度の作成過程】

イニシャルスケールの作成では、せん妄の発症予防に効果的なケアモデルである Hospital Elder Life Program と Acute Care for Elders で行われていた介入モデルを参考に、急性期病院における高齢者のせん妄を予防する看護の枠組みを作成し、質問項目を考えました。次に概念の定義に基づき質問項目の内容妥当性の検討を行い、7つの構成要素を持つ64項目の尺度原案を作成した。回答選択肢は5段階のリッカート尺度を用いた。

1回目の予備調査では、協力の同意が得られた300床以上の急性期の病床を有する3病院において、病棟に勤務し高齢者に対する看護実践の経験がある看護師300名を対象とした。質問内容は、対象者の基礎的情報を含め79問で、調査票は、必要部数を各病院へ郵送し、回収は個別郵送法で行った。144名より回答があり、高齢者のせん妄を予防する看護実践の全項目に回答のあった136名(有効回答率45.3%)を分析の対象とした。項目分析、I-T相関分析およびCronbach α 係数による検討を行った結果、55項目となった。また、探索的因子分析を実施し、7因子26項目が抽出された。文献検討から抽出した7つの構成概念と一部異なる結果となったため、概念の再検討および回答選択肢の部分的修正を行い、高齢者のせん妄を予防する看護実践に関する質問項目を50項目とした。実施にあたっては、日本赤十字北海道看護大学の研究倫理委員会の承認を得た(承認番号29-290)。

2回目の予備調査では、1回目と同様に300床以上の急性期の病床を有する3病院の看護師300名を対象とした。質問内容は、対象者の基礎的情報を含めた66問であった。131名より回答があり、高齢者のせん妄を予防する看護実践の質問項目に欠損のあったものを除外した127名(有効回答率42.3%)を分析の対象とした。1回目の予備調査と同様に項目分析を行い43項目で因子分析を実施し、7因子31項目の結果となり、1回目の予備調査から抽出された7つの概念のうち3概念はそのまま使用できるが、他の概念は細分化あるいは抽出されなかった。これは、1回目と2回目の予備調査における看護師の特性による違いや施設の体制の違いにより、2つの予備調査で抽出された概念が異なったことが原因と考えられた。1回目と2回目の抽出された概念を比較すると、1回目の予備調査で抽出された概念のほうが急性期の特徴を示すと考えられるため、3回目調査は、1回目の予備調査から抽出された7つの概念をもとに2回目の予備調査の結果を参考にしながら、質問項目を再度修正し、信頼性・妥当性の検討を実施した。実施にあたっては、日本赤十字北海道看護大学の研究倫理委員会の承認を得た(承認番号30-311)。

3回目の調査による信頼性と妥当性の検討では、研究の承諾を得た11の急性期病院で高齢者に対する看護実践の経験がある看護師800名を調査対象とし、312名(有効回答率39.0%)を分析の対象とした。再検査法による尺度の安定性とCronbach α 係数により内的

整合性を検討した。また、妥当性は、確認的因子分析と既知グループ法による構成概念妥当性を検討した。調査内容は、対象者の基礎的情報と2回の予備調査で検討した「急性期病院における高齢者のせん妄を予防する看護実践」43項目計59項目で、調査方法は2回目の予備調査と同様であった。天井効果のある4項目を削除して39項目で因子分析を実施した。主因子法によるバリマックス回転を用いた因子分析を実施し、【せん妄のリスクアセスメント】、【チームアプローチによるケア】、【体液バランス・栄養の管理】、【食事摂取を促進するケア】、【患者に合わせたコミュニケーション】、【見当識を保つケア】、【看護チームと医師との検討】の7下位尺度から成る29項目が抽出された。尺度全体のCronbach α 係数は.906で、下位尺度のCronbach α 係数は.775から.871であった。また、再検査法は110名を分析対象とし、 $r=.738$ ($p<.001$)であった。確認的因子分析では、適合度指数は $\chi^2=691.388$ 、 $df=356$ 、 $p<.001$ 、 $GFI=.866$ 、 $AGFI=.837$ 、 $CFI=.921$ 、 $RMSEA=.055$ 、 $AIC=849.338$ であった。既知グループ法として、専門看護師や認定看護師に相談し、指導を受けている看護師のほうが、していない看護師よりも看護実践度の平均値が有意に高かった ($p<.05$)。実施にあたっては、日本赤十字北海道看護大学の研究倫理委員会(承認番号 30-323)および看護学研究科共同看護学専攻研究倫理(審査)委員会(承認番号 19-02)の承認を得た。

【考察】

- 1) 本尺度の作成プロセスは、尺度開発の基本的なプロセスを踏まえて作成しており、対象者数も2回の予備調査・3回目調査ともに因子分析が可能な数を確保できており、本尺度の作成プロセスは適切かつ妥当である。
- 2) 信頼性の検討では、再検査法の相関係数はやや低めであるが許容範囲内である。また、Cronbach α 係数の結果から内的整合性も確保されていることが確認された。
- 3) 妥当性の検討では、3回目調査の項目分析で4項目に天井効果があった。これは、2度の予備調査と3回目調査には看護師の特性や施設体制の違いにより、看護実践が異なったことによるものと判断した。更に、本尺度の適合度指数は、CFIが.9以上を確保でき、それ以外の指数は不十分さはあるものの良好な結果と判断でき、また、既知グループ法による妥当性も支持された。
- 4) 対象の母集団についての検討では、今回の対象者の選定基準は、300床以上の急性期病院に勤務する看護師としたため、高齢者看護やせん妄に対する体制や教育が整った病院が多く、質の高い看護実践度を示したと考えられ、今後は300床未満の病院を含めて調査することで、汎用性のある尺度になる可能性があると考えられる。
- 5) 本尺度の有用性では、信頼性は確保でき、妥当性には若干の不十分さも残すため、今後

の検討並びに洗練も必要であるが、29 項目と比較的項目数が少なく看護師の負担は少ないため、看護師が日常の自己の看護実践を振り返り、せん妄予防の看護実践を向上させていくためのツールとして使用可能であると考えられる。

以上のことから、本尺度は、【せん妄のリスクアセスメント】6 項目、【チームアプローチによるケア】5 項目、【体液バランス・栄養の管理】5 項目、【食事摂取を促進するケア】5 項目、【患者にあわせたコミュニケーション】3 項目、【見当識を保つケア】3 項目、【看護チームと医師との検討】2 項目の 7 下位尺度 29 項目で構成されていた。本尺度は、内容妥当性において更なる検討・洗練が必要であるものの、信頼性や妥当性は概ね良好な結果であると判断できる。海外文献を参考に作成した尺度ではあるが、3 度の調査を実施したことにより、日本の急性期病院における高齢者のせん妄を予防するツールとして使用可能であると考えられる。

論文審査の結果の要旨

本研究は、超高齢社会を背景に、急性期病院における高齢者のせん妄を予防するための看護実践に着目した社会的意義のある取り組みである。文献検討を丁寧に行い、尺度開発に必要なプロセスを踏まえた研究が実施されていた。結果的にファイナルスケールには至らなかったが、今後は急性期病院であればどこでも使用できるような汎用性の高い尺度として完成させることを期待したい。本尺度は、7 下位尺度 29 項目から構成されており、若干の不十分さを有し、今後の検討並びに洗練が必要であるものの、29 項目と比較的項目数が少なく看護師の負担も少ないため、看護師が日常の自己の看護実践を振り返り、せん妄予防の看護実践を向上させていくためのツールとして使用可能と判断できる点が高く評価された。

以上、本研究は、適切かつ妥当な研究方法により、新たな知見が得られており、その内容は看護学の研究として独自性があり、社会的な意義があると評価された。

よって、本論文は、博士（看護学）の学位論文として価値あるものと認め、また、論文内容およびそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。